

わたしの聖戦

◎◎女性が働くとうつらい◎◎75

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

仕事の選び方

昨年末のアメリカ余波の不況到来以後、内定取り消しや派遣切りなどから派生した企業対労働者バトルが続いている。派遣労働者たちが職や家を失い、路頭をさまよう様子がテレビで生々しく放送され、突然仕事を失うとはこういうことか、と背筋が寒くなる思いがする。

一方で、中小企業の経営者たちは、常に人手不足にあえいでいる。景気の良し悪しにかかわらず、いい人材を求めて年じゅう四苦八苦しているのが現実だ。

特に、医療や福祉分野は相変わらずの慢性的な人不足である。とりわけ

を受容するだけの余裕がない。かくして、マッチングが思った以上にうまくいかず、職探し・ひと探しは延々と続くかの如くである。

印象的なのは、今回の事態を受けての若者の態度であった。新成人に、

定を受け、選ぶ立場にあつた就職活動中の学生も、以前よりさらに真剣に慎重に就職先を探しているという。

親の経済的負担を考慮したり、真摯に職探しをするのは当たり前のことなのだから、これらの変化は、若者に

緊張感をもたらす意味ではいいことなのかもしれない。

仕事を選ぶとき、「給料などの条件が合わない」との理由をよく聞く。しかし、本来仕事は給与面だけで選ぶものではないはずだ。あこがれや生きがいや好奇心など、人間が楽しく生きていくために必要な要素は仕事選びにも不可欠だ。子どもたちが将来なりたいたい職業として無邪気に野球選手やお花屋さんをあげるの、まさに条件

突然の派遣切りで
恥を探している
多くは……



二十歳になつての心意気を聞くと、「きちんとした仕事に就きたい」のコメントが多く聞かれ、入試に挑む学生からは「なるべく親に迷惑をかけたくない」と志望大学を絞る傾向がうかがえた。かつて幾つも企業からの内

ではなく夢そのものである。むろん、大人になれば「生活」という現実にかたえるために、様々な条件を優先させることはある程度やむを得ない。しかし、まだ20代30代の人々がそのみを口にするのを見ると、何とも嘆かわしい。たとえ今の状況がどうであれ、その若さで将来を語る言葉が聞かれないとは、いつたい何がこの国で起こっているのかと、ぞつとさせられてしまう。

バブルが弾けたころ、某証券会社では「弾けたバブルは泡だてろ」と幹部がゲキを飛ばしたと聞いた。結果はともかくそこには少なくとも「必死さ」が溢れている。制度や社会や経済のせいにしてばかりではかえって自分を失う。現実には、誰もが必死に生きていかねばならない時代なのだ。思い知るところから始まるのだ。

イラスト・三浦義雄